

第九回日蓮宗教化学研究発表大会

チベット問題と仏教徒の使命

園田 明 宏

昨年三月チベットのラサで騒乱が発生した。

過去ほとんど毎年小規模の動乱は発生していたが、オリンピック開催の年であり世界中のマスコミが中国に集中する機会を捉えて三月十日の蜂起となり世界中に報道された。その時に何が起こったのか、テレビ新聞等によりおおまかな部分は知り得たが、あの報道はほとんどが中国報道機関を経由しており事実はどうだったのか不明な部分も残された様に感じた（抵抗運動で僧侶が商店街の窓ガラスを割ったり店のシャッター等を破壊したりするだろうか？）その後どう鎮圧されたのか不明で報道もなくオリンピックの方へ一般の関心は移ってしまった。しかし、今もチベットの人々は中国の弾圧下で生活をしているのである。チベット問題を考察するに於いて中国との歴史的な経過、民族、言語、領土国境、宗教、その上現在では大量流入して来た漢民族との経済格差及び環境問題等々を加算して事象を検証していく必要がある。中国とチベットの歴史的關係を検証すると非常に複雑であり年号等は省略するが、簡略的にはチベットは吐蕃という王国を長い間形成しており元、明の時代は対等な国家であった。その後、清の時代に一時期は制圧されるが清の崩壊と同時に再び完全独立となっている。一九四九年中国共産党の成立と共にチベットに向けて人民解放軍が侵攻を開始しチベット軍も必死に抵抗するも圧倒的火力の前に全滅となり、首都ラサを人民解放軍が制

圧する。これ以後チベットの国民は完全に植民地化されていく。

そしてチベット寺院の徹底破壊、当初約六千あった寺院等は解放軍の砲弾で瓦礫となり残っているのは十ヶ寺前後となった。僧侶は強制的に還俗させられ生産的効果を上げる為農業、放牧畜に従事、反抗する者は僧侶、市民を問わず刑務所行き、強制労働、拷問、残った僧侶達は布教の禁止、寺の中でただお経を読むだけが許され、その上に共産党の愛国教育が学校を始めあらゆる場所で行われ公用語は強制的に中国語とされチベット語の使用は禁止ダライ・ラマの写真を持っているると即刑務所行き、特に一九五九年の大抵抗の動乱（この時八万以上が死亡）以後弾圧の方法が一段と苛酷になったと伝えられている。

ダライ・ラマはこの時多くの側近と極寒のヒマラヤを越えて亡命しインド北部で亡命政府を確立しそれから五十年の歳月が流れた。この間中国側より十七条協定が提示され強制的に締結されたが、提示した中国側が遵守していない。自治区とは名目だけで世界中の批判を受けても内政干渉として一切無視の状態が続いている。この事象を考察するとチベット問題が包括している内容を単純に人権問題として捉えると本質が見えない恐れがあり中国のチベットに於ける地下資源、ネパール、ブータンとの直接国境の確保等々が懸念されている。表面的に考察しても人権上、歴史上大変な問題であるにも拘らずその内面的に包括されている問題も日本にとって将来直接的に深く関わって来る事例なのである。

それは中国の強大な軍事力に支えられた経済的拡大政策が内面的に存在し国境領土問題として、例えば東シナ海の天然ガス採掘問題等、また専門家の間ではよく知られている中国側の第一列島国境線は沖縄はもとより日本列島全体が含まれる国境線構想が存在するのである。国家の威厳を示したあのオリンピックの開会式での演出が世界中に流れたが、中国のあの笑顔がすべてではない事を知っておくべきである。

聖火リレーが世界中でどうなったのか、わざわざエベレスト山まで聖火を運び上げる中国の思惑に世界中が称賛し

ただろうか。同じ時刻にチベットでは何があったのか。

経済的見地より日本だけでなく世界中が利害優先で中国に面と向かって批判は困難であるのなら、せめて我々は同じ仏教徒として批判、問題提起をしていくべきではないだろうか。仏教徒の使命は世界平和であり釈迦の教えは非暴力、不殺生であり常識的正論である。

しかし同時に仏教だけでなく宗教者は、自己の信奉する教義、教えを弘める施設（寺院等）同信者、布教活動する人々、僧侶をお互い擁護して、教団を未来に継続し発展させ繋げていく義務と責任があるのではないだろうか。チベットの僧侶達が命を掛けて抗議運動を続けているのは正にチベットの仏教や伝統、文化を護る為ではないのだろうか。今後も彼らは護るべき大切な事柄の為に命を掛けて弾圧され続けても僧侶や若者達は抵抗して死んでいくであろう。

我々はこの現象をどの様に思考すればいいのであろうか。ダライ・ラマが亡命して約五十年経過したが、その間中国側に対話路線の信条で解決を求め続けてきたにも関わらず今日でも何の解決も見出せないでいる。チベットの人達が過去に中国に何をしたのか、何も無いのに言語を取られ、信奉するお寺を壊され、自由を奪われ、抵抗しただけで過去膨大な人々が殺され続けている。その数約百万人以上とされる中国側は抵抗運動をテロと見なし対処している。自分たちの昔からの文化、伝統、言語、宗教、教育、そして何よりも民族そのものがわずかに形だけ残しても消滅しようとしている。（例、モンゴル自治区の正当なモンゴル人は約二割になってしまった）経済的支援という名目で道路や鉄道が建設されてチベットの人も以前より便利になり多少は経済的に生活が向上したかも知れない、しかし漢民族の人々が大量に入り込み開発目的により山々の木々が大量伐採されこれにより環境問題が発生（川の氾濫）、商業上の優先的地位は漢民族の独占となり経済格差の拡大、半強制的な結婚により正統民族の減少等すべて中国側の思惑通り変化していく状況を考察すると残された時間はあまり無い様に思われる。

ダライ・ラマの生存中に解決の道を模索しなければ永久に解決は無いのかも知れない。

あくまで内政干渉という中国側の論理を国連で再び検証してチベット現地に国連の監視体制が確立され安全が維持されていく方式に期待せざるを得ない状況である。日本と米国は一九七二年に国交回復を行いその後多少でもチベットの様子が伝わるかと思われたがほとんど情報はなく、流れてくる内容は中国政府の管轄下でのニュースであり、動乱等は存在しない様な報道ばかりで、我々が検証可能な事は書籍に頼る以外一般的に方法はなくそれも書籍の記載がすべて真実とは思わず複数の書籍より共通部分を選択すればこの事象は事実であろうと断定しても問題ないと思われる。この部分だけでも我々の想像を絶する様な事が書いてある。(拷問等々) 本当は中国側の主張が詳細に記載されている書籍が発売されておれば良いのだが内政問題として処理している事象を反論出版するはずもなくその様な書籍が出るとより一層世界から矛盾点を叩かれるであろう。

平和とは何であろう。ある日、突然となりの国から大量の軍隊が入って来て言う事を聞けと言われたらどうすればいいのか。我々日本人は平和とは水や空気と同じ様にあり続けて当たり前と思っではないだろうか。このチベットの現状を見ると平和とは常に維持されているものであり勝ち取るものである事を考えておかねばならない。

チベット人に中国人になれといくら言われてもチベット人はチベット人以外にはなれない。民族紛争は世界各地で起きているが、チベットの問題とチエチエンやボスニア、ブルジア等々の問題とは根本的に異なる問題である。

仏教徒の使命として信じる教えに命を掛ける事は間違いないのであろうか。チベットの僧侶達は間違いを犯しているのだろうか。平和なこの国では論外な事かも知れないが、もし自分のお寺が暴力的に破壊されそうになった時、本堂の御本尊や仏具等を壊され身体に危険を感じた時、寺を放置して逃げ出すのが信仰をしている者の正しい道であろうか。

チベット僧の抵抗を考える時、我々は何の様に思考すればいいのであろうか。
日本が平和であるが故に考えるべきではないだろうか。

参考文献

- 中国が隠し続けるチベットの真実（扶桑社新書）ペマ・ギャルポ著
チベット問題を読み解く（祥伝社新書）大井功著
宗教が分かれば中国が分かる（創土社）清水勝彦
叡智の鏡（チベット密教）（大法輪閣）ナムカイ・永沢哲訳
図解宗教史（成美堂出版）中村智哉
チベット密教の本（学習研究社）平岡孝一、他
チベット大虐殺の真実（オークラ出版）張本真、他
ダライ・ラマ入門（幻冬社）長田幸康
愛と非暴力（春秋社）ダライ・ラマ 三浦順子訳
チベット（上下巻）（東京大学出版部）山口瑞鳳
チベットの仏教と社会（春秋社）山口瑞鳳
チベットの言語と文化（冬樹社）長野泰彦